

## 公開鍵暗号の例: RSA 暗号

### Rivest, Shamir, Adleman (1977)

- 大きな素数  $p, q$  を選び、積  $N = pq$  を作る
- $N$  を用いて、公開鍵  $e$  ・ 秘密鍵  $d$  の対を作る
- 暗号化の計算は  $N$  と公開鍵  $e$  とから可能
- 復号は秘密鍵  $d$  を用いる
- $N$  と公開鍵  $e$  とから秘密鍵  $d$  を求めるには、 $N$  の素因子分解  $N = pq$  が必要
- しかしそれは困難 (膨大な計算時間が掛かる)

## RSA 暗号 (Rivest-Shamir-Adleman)

$p, q$  : 相異なる大きな素数

$N = pq, m = \text{lcm}(p - 1, q - 1), ed \equiv 1 \pmod{m}$

- $(N, e)$  : 公開鍵 (暗号化鍵)
- $d$  : 秘密鍵 (復号鍵)

平文・暗号文は  $0, 1, \dots, N - 1$  に符号化  
( $\text{mod} N$  で考える)

平文  $M$  の暗号化 :  $C = E(M) \equiv M^e \pmod{N}$

暗号文  $C$  の復号 :  $M = D(C) \equiv C^d \pmod{N}$

## 冪乗の高速計算

$p, q$  : 相異なる大きな素数 (実際には 1024 bit 以上)

$N = pq$ ,  $m = \text{lcm}(p - 1, q - 1)$ ,  $ed \equiv 1 \pmod{m}$

- 平文  $M$  の暗号化 :  $C = E(M) \equiv M^e \pmod{N}$
- 暗号文  $C$  の復号 :  $M = D(C) \equiv C^d \pmod{N}$

暗号化して復号すると元に戻ることは判った。

しかし、高速に計算できるのか？ ( $e, d$  は巨大)

→ 冪乗の高速計算法が必要

## RSA 暗号 (Rivest-Shamir-Adleman)

公開鍵  $(N, e)$  から秘密鍵  $d$  が計算できるか？

- $N$  の素因数分解  $N = pq$  を知っていれば容易
- 事実上  $N$  の素因数分解と同程度の困難さ

「困難さ」… 計算時間が掛かる

RSA 暗号の安全性  $\iff$  素因数分解の困難さ

“計算量的安全性 (computational secrecy)”

## 計算量 (complexity)

- **時間計算量**: 計算に必要な手間  
(基本となる演算の回数)
- **空間計算量**: 計算に必要なメモリ量  
(必要な数表の大きさ・覚えておくべき途中結果)

理論上の厳密な定式化には  
計算モデルとしてチューリングマシンを用いるが、  
通常は、決まった桁数の四則演算 1 回を  
1 ステップと数えることが多い

入力データ長  $n$  に対する

増加のオーダー (Landau の  $O$ -記号) で表す

## Landau の O-記号・o-記号

$f, g : \mathbb{N} \longrightarrow \mathbb{R}_{>0}$  に対し、

$$f = O(g) \iff \exists N > 0, \exists C > 0 : \forall n : \\ (n \geq N \implies f(n) \leq Cg(n))$$

$$f = o(g) \iff \frac{f(n)}{g(n)} \longrightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty) \\ \iff \forall \varepsilon > 0 : \exists N > 0 : \forall n : \\ (n \geq N \implies f(n) \leq \varepsilon g(n))$$

## 計算量 (complexity)

問題を解くアルゴリズムによって決まる

… アルゴリズムの計算量

→ アルゴリズムの効率 の評価

問題の計算量:

その問題を解くアルゴリズムの計算量の下限

最も効率良く解くと、どれ位で解けるか

= どうしてもどれ位必要か

= どれ位難しい問題か

→ 問題の難しさ の評価

## 基本的な例

- 加法:  $O(n)$
  
- 乗法:  $O(n^2)$  かと思いきや  $O(n \log n \log \log n)$   
(高速フーリエ変換 (FFT))



## 例: 互除法

- 入力: 正整数  $x, y$   
入力データ長:

$$n = \lceil \log_2 x \rceil + \lceil \log_2 y \rceil \sim \max\{\log x, \log y\}$$

- 出力: 最大公約数  $d = \gcd(x, y)$

### 計算量の評価:

- 割算の回数:  $O(n)$
- 1回の割算: 素朴な方法でも  $O(n^2)$   
(FFT を使えば  $O(n \log n \log \log n)$ )

→ 併せて  $O(n^3)$  (FFT で  $O(n^2 \log n \log \log n)$ )

… 十分に高速なアルゴリズム

## 重要な難しさのクラス

多項式時間 P  $\dots \exists k : O(n^k)$

- “事実上計算可能” な難しさ
- 計算モデルの変更に関して頑健な  
計算量のクラス

「しらみつぶし」が入ると  
大体  $O(2^n)$  程度以上になる (指数時間 EXP)  
“事実上計算不可能”